



I-OWA マンスリー・セミナー座談会より 投資教育と個人投資家の役割

座談会：、三和 裕美子氏、参加者のみなさま
レポーター： 赤堀 薫里

参加者 | 前から思っていました、個人投資家に株式投資の教育をするという考え方がありますが、朝から晩まで働いている世間一般の人にそんな時間があるのかなと疑問に感じます。それよりも、中間的な存在の人を育てる。投資家と利益を共にする方向で営業する専門家を育成する社会に変えた方がいいのではないのでしょうか。

岡本 | 私も同感です。金融庁が考えているような、投資教育のレベルが本当にそこまで必要なのか疑問ですね。少なくとも、株とは何かは知っておかなくてはならないけれど、そんなに複雑なことを知る必要性はない。同時に中間に立つような独立したファイナンシャルアドバイザー(IFA)のような人たちがもう少しフィーベースで個人投資家のために活躍できるようになるといいのではないかと思います。



参加者 | 私もかなり近い意見です。個人投資家のエンゲージメントという話を聞いて、個人投資家が現状でどういう投資家かという、トレーディングや、短期売買の人が多い。「長期保有や良い企業を見つける」ということに対してほとんど関心を持っていない。一つは、個人投資家にそうでない投資の世界があることを知ってもらわないと、こういうエンゲージメントをしても、大抵の投資家は「もっと株価を上げろ。配当をよこせ！」というレベルになってしまうのかなという感じがします。一方、機関投資家の中にも、若干、投資信託でエンゲージメントを売り物にして、そこそこ結果を出している所もあるので、そういう所がもっと増えて行く方が先なのかな、という気がします。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

参加者 | 社会全般、資本主義に対する理解ができていない。そういう教育を義務教育や高校教育レベルで入れなければいけないのに欠落している。何か違う社会を正義と考えているところに違和感があります。その延長線上に投資の問題も理解されていないという問題があると思います。

参加者 | 個人もそうですが、国の政策を握っている偉い人達が理解していないという感じがいつもします。政策を動かす人や、個人の金融教育をどうしましょうかという立場の人達がわかっていないと思います。

岡本 | それと同時に、企業の問題です。企業経営者が株主との関係や従業員、顧客との関係をどうしたものなのかわかっていない。ただ、うるさい人達に対して良い顔を見せられればそれでいいというのが、経営者の答弁のスタイルになってしまっていますね。

参加者 | 大きい企業になればなるほど関係者が増えてきます。小さい企業だとお金を出してもらっているという感覚を持っている経営者が多いですね。投資期間、回収期間が過ぎればモノになったりするので、中型、小型に近い企業のほうがアウトパフォームする。基本的には株価が上がっているというのは、そこに起因していると思います。

岡本 | 行政は、個人投資家に対して「投資教育」に力を入れていますが、その半分くらいの力を、企業に対する厳しい姿勢に使ってほしいですね。違法と思われる悪いことをした企業経営者を監獄にぶち込んでしまうくらいの。悪いことをしたらこういうことになるという姿勢を見せることが、大切だと思います。そうすると、投資家も金融庁は自分達の味方だ、自分たちを守ってくれるという認識が広まっていくと思います。投資に対する安心感が広まります。

三和 | 投資家が安心して投資できないような企業を上場させておくというのは、どうでしょうか。企業は市場の商品じゃないですか。そこに置いておくこと自体、市場の信用を損ねます。個人投資家に長期投資をしろと言っても、「こんな商品があるのではねえ」と思う訳です。市場をちゃんとしてほしいですね。

取引所自体が株式会社化しています。上場させていくらの収益という話じゃないですか。一応、日本証券取引所 HD の傘下に、東京証券取引所と自主規制法人があります。その中の自主規制法人が上場審査をしています。「同じ傘下に入っていて、同じグループの収益を追求していく中では、本来監視できないし、上場審査も出来ない立場でしょ」と、言いたくなりますね。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

参加者 | 日本では、個人投資家はマイノリティだということを認識いただきたいです。今の個人投資家の大部分は長期投資家ではない人達です。日本で証券を取引している人達は人口の1割くらい。証券口座自体が2,300万口座ぐらいいかないので、複数口座を考えるとアクティブにやっている人は1,000万人くらい。1割位しかマーケットシェアがないものを調べてみると、株式以外では釣りやパチンコでぐらいいです。つまり、個人投資家はマイノリティなわけです。残りの9割の人達は投資に対して関係ないと思っているので関心がないだけに、どの話をしてもしるなわけです。

岡本 | これからの時代を考えていくと、普通の一般生活者、全然投資に関係なかった人達に、「将来の自分は今の自分が何らかの手を打っていかないと困りますよ。それは単に銀行に預金しておくだけではなくて、若干のリスクをとりながら資産を成長させていかないといけない。そのためのツールとして株式というものがあります」というところをどうやって広めていくのかが問題です。ただ現状を考えてみれば、株式に関心のない人達は99%位かもしれない。

先日、ある懇親会で「私はFXや株の短期取引をやっていてすごく楽しいです。でも、退職後の資産運用はどうすればいいのでしょうか」と、真剣に聞く人がいました。結構、そういう人が多いのです。彼は、株の売買の仕方は知っています。しかし、退職後のためにどういう風に株式を使っていけばいいのかわからない。要するに株で損したり、得したりというのは、ゴルフやパチンコや宝くじをするのと同じで「お楽しみ」です。それはそれで構わないし、大いに楽しんでもらえばいいけれど、それとは次元の違うものがこれから必要になってくるのではないかというのが大きなテーマですね。どうやって増やしていくのか。

参加者 | 今度、家庭科の中高の先生の全国ネットワークの大会で、お金の話をしてきます。実は全然学校でお金の授業はしていない。先生はお金のことを知りません。日本にはお金の教育をされていない人達が山のようにいるわけです。

学校の教育の中に、如何にお金についてのカリキュラムを入れ、大人もそうだけど、子どものレベルから投資とは何か理解してから社会人になってほしいですね。社会人になるといろいろ忙しいですから。

岡本 | やはり子どもの時から自然に教えていかないと。

参加者 | 去年日銀が、先生のためのセミナーをやっていました。家庭科で教え始めています。いきなり投資ではなくて、まずは「お小遣い帳をつけましょう」から始まります。「お父さんとお母さんがどうやってお金を稼いでいるのか」、「どう使っているのか」、「なぜ貯金しているのか」から始まり、最後に投資にいきます。投資はアドバンスコースで、「まずは貯金しようね」、「無駄遣いしないようにしよう」ですけど。



長期投資仲間通信「インベストラ이프」

参加者 | 投資教育が大変だと言いますが、背景に金融の肥大化がありますよね。

参加者 | お金の値打ちがなくなってきていますよね。

三和 | 金融肥大化になり、企業の成長が低成長になり設備投資しないので、投資に行く部分が投機になっています。しかし、株式会社に投資をするというのは、投機ではないということを広めていかなければならないと思っています。でも、現実には投機がメインになっていますね。

参加者 | 成長率が低下している部分をレバレッジでカバーしているということでしょうか？

三和 | 日本のアベノミクスの改革も、株主資本が大きすぎるので、レバレッジをもっときかせましょう！ということを行っています。

岡本 | お金の量が増えたので1円当たりの経済が生み出す付加価値が減ってきている。希薄化しているのです。背景は、アメリカを別とした主要国の人口の問題があると思います。1円当たりの収益率が減っていく中で、それをどうカバーしていけばいいのかというと、レバレッジみたいな話になる。或いは、クレジットの低いものに移っていくとか、回転率を高めるという話にどうしてもなってしまう気がします。その辺の最終的な収束はどうなるのか。そこにエグジット戦略の難しさがありますね。

参加者 | ピケティがキャピタルの本を書きましたよね。経済成長率よりもキャピタルの成長率の方が高いのが、第2次世界大戦まで。第1次世界大戦前の50年間で、第一次グローバリゼーションと言われています。今、第二次グローバリゼーション。1970年代くらいですかね。資本が優勢になってきている。要するに経済成長率よりも資本にかけている時代がきているわけです。前回は戦争によって収束しました。今回はどうなるのか。戦争ではやりにくいと思います。多分お金の価値がどこかで手直しされて、元に戻るのではないのでしょうか。

そういう意味では、お金を投資にかけていくには、難しい側面にあると思います。

岡本 | 大変、課題が多い株式市場ですが、今日は深い内容のある座談会ができました。この分野、今後もみなさんと考えていきたいですね。どうも、ありがとうございました。